

## 雲岡石窟 鎮国寺 双林寺 平遥古城

雲岡石窟（うんこうせつくつ）：1902年、東京帝国大学助教授であった伊東忠太は、中国の建築古跡の調査旅行に赴く。そして、北清建築調査のため山西省大同を訪れたとき、偶然に大同郊外の雲岡石窟を発見、調査旅行報告として記した。「北清建築調査報告」（建築雑誌 189号～1902～）の中で、「大同の石佛寺」と題してその概要を発表した。学史的には、これをもって「雲岡石窟の発見」とされ、伊東忠太は「雲岡石窟の発見者」としてその名を留めることとなった。そして、この発見の話は、ハノイにある極東学院（敦煌文書を持ち帰ったペリオは、ここの中国語教授をしていた）に伝わり、研究員であった仏人・シャヴァンヌが雲岡現地に出張調査して「華北考古図譜」を刊行した。この本には、雲岡石窟に関する図版が多数掲載され、全容が世に広く知らしめられ、雲岡石窟寺の名は急に世界の注目を集めるようになった。

伊東忠太の発見報告は、あくまで「北清建築調査報告」の一部として、小文かつ写真図版も少ないかたちで発表されたため、シャヴァンヌに雲岡石窟紹介者の名をなさしめるようになったようである。

伊東忠太は、後に「こういう点では、欧米人はなかなか抜け目がないね。日本人はいつも損をする」と、述懐していたという。ここで、伊東忠太が雲岡石窟を発見するに至った、いきさつについて記してみたい。伊東忠太という人物は、著名でよくご存知のことと思うが、我国近代の建築学者の草分けといえる人物。

法隆寺を研究して明治31年「法隆寺建築論」と題する論文を発表したが、これは日本建築史における最初の論文で、建築史学の創始者といわれる。

また「建築学」という言葉を初めて用いたほか、自ら多くの建造物の建築設計にあたった。主な建築作品には、大谷光瑞の私邸であった二楽荘、築地本願寺、明治神宮、平安神宮、大倉集古館などがある。

1943年(S18)には、文化勲章を受章している。後代「建築巨人・伊東忠太」と称されたほどに、日本の建築学、建築史学の発展は、伊東忠太に始まり、伊東忠太なくては為し得なかったといっても過言ではない人物である。伊東忠太が、雲大学では、教授に昇進するにあたっては「一度、欧米に3ヵ年留学経験をすることが必須」という不文律があった。岡石窟を発見する中国などの歴訪に出かけるに至るには、面白いエピソードが残されている。

当時、東京帝国助教授であった伊東にもその順番が回ってきた。「法隆寺建築論」を発表していた伊東は、大陸に渡って仏寺等を調査し、その源流や実相を明らかにすることを念願としており、欧米の代わりに中国、インド、トルコへの留学を切望した。ところが先例が無いとして受け入れられず、文部省まで巻き込んですったもんだした揚句、「帰路は欧米経由とする」という珍妙な条件の下に、やっとこのルートでの留学が許可された。

そして、弱冠31歳の伊東は、1902年(M35)中国大陸へ渡航、6月に大同を訪れたのであった。

旅行記によると、北京から張家口まで6日かかり「驢馬を駆って岩石危うき山岳を越え、砂塵に咽ぶ平野を行く」という有様。そこからは馬の調達に成功、大同までは通算15日かかりでやっと到着ということであるから、大変難渋の旅であったことが偲ばれる。

大同で、知事に会って「珍しい古建築は無いか？」と訪ねたところ、

「遼金時代の遺構は城内にもある。古文献によれば、大同の西三十里のところ雲岡に北魏時代の遺構があるという。ただしまだ実地に見たことが無いし、支那の文献には錯誤・誇張が多いので信用は出来ない」との答えであった。

伊東は、とにもかくにもこの雲岡の地を訪れてみることにした。訪れてみて「腰を抜かすほど驚き且つ喜んだ」とは、伊東の弁である。紛れも無く、雲岡石窟群は北魏時代の巨大遺構であり、各窟に彫出された建築的細部装飾は法隆寺堂塔のそれと寸分も違わなかったのであった。

伊東はこの発見物語について、次のように記している。

「元来この石窟寺の発見は、全く偶然であった。この地に拓跋氏時代の遺跡が、現存していようとは夢想だにしていなかったのである。実は大同では、遼や金の遺物を探るのが目的であったところが、案外な発見をして、実に喜んだ」（「支那旅行談」建築雑誌 189号・1902）

かくして、歴史の流れの中で忘れ去られてしまっていた「雲岡石窟」が、北魏時代の巨大な仏教美術遺構の文化遺産として、現代人の前によみがえる事となるのであった。ただし、中国国内では雲岡石窟が、全くもって忘れ去られたのではなく、その存在は知られていたようである。

清朝の学者、朱彝尊も「曝書亭集」の中で、「雲岡の寺、数十建つ。拓跋氏より今に存するは、特にその一のみ。石仏の大なるは、高さ七十余尺、小は径尺に至る。……」と記している。

そういった意味では、伊東忠太は「日本や欧米に雲岡石窟の存在とその文化史的意義を知らしめた最初の人」ということになるのだろう。

**雲岡石窟**（靈巖寺）：大同市の市街西方 16 キロの武州山南麓にある東西 1 キロにわたる石窟寺院。現存のメインの洞窟は 53 窟。石像は 5 万 1000 体にのぼり、中国最大の石窟の一つであるばかりでなく、世界的にも有名な石窟芸術の宝庫である。太和 19 年（495）の洛陽遷都の前にほぼ現在の形になっている。中国三大石窟中、この石窟は石像の雄大さと内容の豊富さで現在でも高い芸術的魅力を持つ。他の二つは、洛陽の龍門石窟と敦煌の莫高窟であるが、「敦煌の美術、雲龍の彫刻」などと比較対照される。雲岡石窟の中で最も古いのが、曇曜五窟（16-20 窟）で、これらは、北魏五代の皇帝（道武・明元・太武・景穆・文成）の姿を模して作られたといわれる。なかでも、第 20 窟の露出した大仏は雲岡石窟の象徴ともなっている。これらの仏像は、薄い法衣をまとい、ガンダーラ様式が中央アジアを経て中国に伝わり、河西回廊で中国に定着してゆく過程での意匠を示していて興味深い。また、第 5・6 窟は、一対窟となっており、第 5 窟の中央の座仏は高さ 17 メートルで最大。第 6 窟の壁面には仏・菩薩・羅漢・飛天、天井には三十三天神と騎馬人が彫られ、雲岡芸術の逸品ともいわれる。雲岡石窟、元は靈巖寺といい、現在では石仏寺などと呼ばれる。北魏の沙門統である曇曜が文成帝に上奏して 460 年（和平元年）頃に、桑乾河の支流の武周川の断崖に開いた所謂「曇曜五窟」（第 16 窟、第 17 窟、第 18 窟、第 19 窟、第 20 窟）に始まる。三武一宗の廃仏の第一回、太武帝の廃仏の後を受けた仏教復興事業のシンボリック的存在が、この 5 窟の巨大な石仏であった。その後も、第 1・2 窟、第 3 窟、第 5・6 窟、第 7・8 窟、第 9・10 窟、第 11・12・13 窟と大規模な石窟の造営が続けられ、雲岡期（460 年-494 年）と呼ばれる中国仏教彫刻史上の一時期を形成した。様式上は、最初期の「曇曜五窟」には、ガンダーラやグプタ朝の様式の影響が色濃い。その後の石窟ではギリシア様式の唐草文様に代表される西方起源の意匠も凝らされており、当時の建築様式を模した装飾も豊富に見られる。しかし、洛陽へ遷都する 494 年以降の末期になると、初期の雄大な質感は姿を消し華奢で力強さの感じられない造形が増加する傾向が顕著となる。そして、この傾向の延長線上に、続く龍門期が待ち受けている。また、その影響関係で言えば、雲岡の様式は涼州（甘粛省）の石窟にその淵源を持つとも考えられるが、雲岡の影響は龍門・天龍山・南北の響堂山などの広範囲な石窟寺院に及んでいる。日本人建築学者 伊東忠太が発見。付近に露天掘りの炭鉱がある影響で石炭の粉塵による汚染が進んでおり、対策が急がれている。北魏鮮卑族初めて開鑿、曇曜五窟が必見、砂岩のため風化がひどい。洛陽の龍門石窟、敦煌の莫高窟とともに中国三大石窟とされている。入口を入ると 6 窟の前に出た。6 窟の右には 5 窟があり、いずれも石窟の前に清代に建てられた 4 層の樓閣がある。まず 5 窟を見学する。前室には 16 羅漢の壁画が描かれていて、奥には雲岡石窟最大の 17m の釈迦像が彫られている。釈迦像の右側には高さ 10m の薬師如来、左には高さ 10m の阿弥陀如来の像がある（現在は無いのでしょうか、また盗掘ですか）。堂内には約 2000 体の仏像が刻まれていて美しく彩色されている。仏像の体にたくさんの穴が開いているが、後世に石像の上に藁を交ぜた泥を塗ったとき泥を固定するために木を埋め込んだ跡である。続いて 6 窟を見学する。四天王が彫られた前室を過ぎると中心柱のある四角い部屋に出る。中心柱の四方には釈迦の像が刻まれている。周囲の壁に釈迦の一生が彫られ、天井にはたくさんの兜卒天（とそつてん）が彫られている。これらの像は彩色されほぼ完全な形で残っている。部屋の奥にも仏像があるがこちらはひどく浸食されている。6 窟の左側の崖には多数の石窟が並んでいる。まず 7 窟を訪れる。彩色された仏像があるが惜しいことに風雨で浸食され傷んでいる。7 窟と 8 窟は小さな通路でつながっていて通路の天井には蓮の花が刻まれている。8 窟の入口の右側にはシヴァ神、左側にはヴィシュヌ神が刻まれている。奥には 3 体の仏像が刻まれているがこの仏像も浸食されている。これらの洞窟も保存状態がよく彩色が残っている。10 窟の左側には 11 窟がある。11 窟は中心柱方式で正面には釈迦の立像が彫られている。12 窟も美しい彩色が残っている。正面上部にはさまざまな楽器を持った像が彫られているので音楽堂と呼ばれている。13 窟には高さ 13m の脚を交差させた菩薩像が刻まれている。14 窟の彫刻は

浸食されて傷んでいる。15窟は万仏洞と呼ばれ壁面は小さな仏像で埋め尽くされている。15窟の左に穴のあいた洞窟があるが日本人が盗掘した跡だという。盗まれた仏像は現在メトロポリタン博物館に保存されている。16窟から20窟は曇曜五窟と呼ばれ初期に作られた石窟で北魏の5人の帝王の姿を象徴した仏像といわれている。16窟の仏像は13.5mの高さがあり遊牧民の服装で首からネクタイ状の布を下げている。18窟には高さ15.5mの立像が彫られている。20窟の主仏は雲崗石窟を代表する露座大仏で高さが13.8mあり早期の彫刻の代表作とされている。本当に、中国に仏心の偉大さには感心させられます、なのに、ここでも盗掘ですか、意味のない博物館に在るよりは、元に戻されたら、どんなに釈迦がお喜びになるでしょうか。

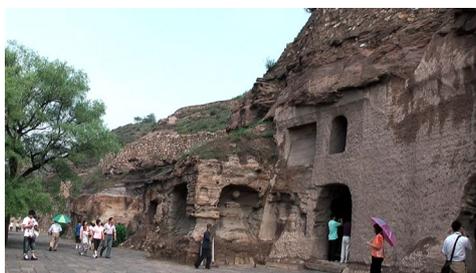


駐車場整備のための大規模な工事

東西1キロにわたる石窟寺院



高さ17メートル釈迦坐像右には高さ10mの薬師師如来、左には高さ10mの阿弥陀如の筈ですが何故か現存しません



砂岩のため中央より左右の先端に行くほど風化がひどい



雲崗石窟の中で唯一岩にへばり付いた木造の建物

右より左中央に向かった写真



穴の中は全部石造53窟。石像は5万1千体



洞窟の中は、天井には沢山の兜卒天が彫られる。像は彩色されほぼ完全な形で残る



メインの釈迦石造右は薬師如来・左阿弥陀如来のはず、在りません 堂内には約 2000 体の仏像が刻まれています



釈迦像を中心に左右の石窟は一山全体が石窟であり、膨大な広さと膨大な石仏お見事、何年間の造作でしょう

**鎮国寺**：鎮国寺は古い寺院で典型的な五代の仏寺である。本殿の万仏殿は五代北漢の天会 7 年（961 年）の創建で、北宋の時代は 960 年から始まるが、この地域は 3 年経っても、まだ北宋の領域に組み込まれていなかった事がわかる。前院・後院とふたつの部分に分かれ、14 の建物が配置されている。観音殿以外の各殿には塑像が現存し、特に万仏殿の建物と中の彩色仏像が美しい。

南禅寺、仏光寺に次ぐ中国で四番目に古い木造建築の一つである。寺内の天王殿には大きな塑像の四天王像がある。万仏殿は鎮国寺の本殿で、外形は正方形、屋根は大きな傘のような形をしている。このような形の建築は歴史上あまり類例がない。

殿内には 11 尊の仏、菩薩、弟子、金剛、供養人の塑像がある。身体が大きく、肉付きも豊満である。これらの塑像は五代の原物で、きわめて貴重なものである。

この他、鎮国寺には、明代の壁画、皇統鐘、半截碑などの見所がある。

建物は、五台山の仏光寺と同様、斗きょうと呼ばれる屋根を支える木組みと屋根に載る鴟尾の様は、日本の奈良の古建築群を想像させる。

鎮国寺は、平遥故城と共に世界遺産に指定されている。



鎮国寺石碑



四天王殿には四天王

鎮国寺・全景 14 の建物



大きな素朴な本堂

立派な天王殿



素朴な本堂内には釈迦像



観音菩薩像



素朴な山号額



万仏殿内の左の羅漢



仏殿内の右の羅漢



鐘楼



太鼓は在りませんが、鼓楼

双林寺：山西省平遥の西南 6km のところに宋、元、明、清の塑像芸術を集めた宝庫、双林寺がある。双林寺は、以前は中都寺といい、遅くとも北齊の武平 2 年（571 年）には寺が建てられており、少なくとも 1500 年の歴史がある。中都寺が双林寺と改称したのは、仏祖の「双林入滅」の故事にもとづいたものであろう。仏教經典の釈迦がインドのクシナーラ河畔の沙羅双樹の下で涅槃を迎えた時、周辺の沙羅双樹が一斉に白い花を咲かせたという故事である。双林寺は元来は規模が非常に大きく、この辺りの景勝地であった。しかし、度重なる兵火でもととの建築、壁画、塑像はすでに存在しない。現存の建築、塑像はほとんどが明代の作品である。

北魏時代の創建だが、ほとんどが明代に再建された。見所は、各殿内に安置されている彩色塑像で、その数は 2052 体、内 1566 体が完全な形で保存されている。左の伽藍配置図に記されている像、すべてが見所であるが、特に羅漢殿の十八羅漢の細かな描写、千仏殿の韋馱天の精巧さは、必見である。韋馱天（天神像ともいう）の躍動感は、西洋の彫刻の名作にも劣らないと評価され、中国の多くの美術学生が模写に訪れるという。双林寺は別名「東の彩色塑像彫刻芸術の博物館」とも形容される。

寺は南向きで、敷地面積は 15000 m<sup>2</sup>、周囲はレンガの壁で囲まれていて、壁には矢狭間や胸壁があつて砦の趣がある。壁の南側にアーチ型の山門があり、堀の中は東西に分かれ、東側には禅院、経堂、僧舎などがある。西側は双林寺の粋が集まっている部分で、中軸線上に山門、天王殿、釈迦殿、大雄宝殿、仏母殿が並んでいる。また、釈迦殿前庭の両側には羅漢殿と地藏殿があり、この二つの配殿の南側には関羽と土地神が祭られている。釈迦殿の両側には鐘楼と鼓楼、大雄宝殿前庭の両側には千仏殿と菩薩殿がある。

天王殿は間口 5 間、奥行 3 間の切妻造りで南側の軒の間には 1 列に並んだ高さ約 3m の四天王の塑像がある。殿内に入ると、正面には近世では珍しい天冠を戴いた弥勒菩薩の座像があり、脇侍の梵天、帝釈が左右

に控えている。南側の壁には北向きに座った大きな四天王があり、北側の壁の両側には八大菩薩が安置されている。この仏殿内の配置は現存寺院としてはきわめて特異。

寺内の各仏殿には塑像が満ちみちている。中でも千仏殿と菩薩殿は懸垂式塑像の殿堂と言っても過言ではない。寺内の塑像は大きいものは丈余、小さいものは1尺ばかり、全体で5052体の塑像がある。このうち、保存の良いものは1566体である。

釈迦殿本尊の釈迦像は顔の肉付きが豊かで穏やかな感じがある。衣紋は直線的で身体にぴったり貼りついており、よく古風を留めている。これは明代塑像の中でも数少ない名品である。殿内四周には経典故事にもとづいた塑像があり、さまざまな塑像がさまざまに組み合わせられて釈迦の「八相成道」物語が描かれている。塑像の製作手法は多様で、構図も精妙である。また仏殿の北側の軒下に北向きに安置された彩色レリーフ、渡海観音はすばらしい名品。

釈迦殿の東配殿は羅漢と関羽の2グループで構成されている。羅漢殿に描かれているのは「十八羅漢の観音詣」で、実際の間人ぐらいの大きさの羅漢が観音の両側に立っている。塑像は生き生きとして真に迫り、今にも動き出しそうな名品。関公殿には関羽の一生の事跡を描いた塑像が置かれている。

釈迦殿の西配殿は閻魔王と土地神の2グループで構成されている。閻魔殿に描かれているのは、十閻魔が地蔵に詣でる場面、土地神殿には朴訥な民間の神の姿が表現されている。これらの塑像は、双林寺では仏教と道教が融合していたこと、双林寺の芸術が民間芸術と融合していたことを端的に示す。

大雄宝殿は入母屋造りで、寺内で最も高く大きい建築である。殿宇の飾り物の形と装飾の方法はどれも典型的な明代の特徴を備えている。殿内の正面中央には、三尊仏が祭られ、両側には文殊と普賢がある。そして三尊仏の前には鑄鉄の像に粘土をかぶせた阿弥陀仏がある。この殿内の塑像は清代に作り直されたもので、他の仏殿の塑像に比べるとやや劣る。

大雄宝殿の西側には間口7間の菩薩殿がある。殿内の四周には数百体の菩薩像が壁に掛かっている。中央に座している本尊は千手観音で、頭に仏龕形の宝冠を戴き、裸の上半身にさまざまな瓔珞を飾っている。衣は身体に沿って下垂し、下半身には紅色の裳を着け、26本の手には腕輪をはめている。仏師の仕事も丹念で、得難い傑作である。

大雄宝殿の東側にはその名通りの塑像の殿堂、千仏殿がある。中には千体近くの菩薩像が、いくつかの組に分かれて祭られている。その内の一組は「善財童子の観音詣」で、太師椅子に静座する観音、首を傾けて観音を仰ぐ善財童子、師は弟子を慈しみ、弟子は師を敬愛する様がきわめて精妙に生き生きと描かれている。もう一組の「自在観音を見上げる善財童子」では、さらにいっそう幼子の天真爛漫さが巧みに表現されている。

双林寺の塑像芸術は世界公認のもので、塑像芸術の花と言ってもよい。中国塑像芸術史の知識のある人ならみな知っていることだが、中国の宗教塑像は明清時期になると下り坂になる。この双林寺の塑像は明清時代の塑像であるにもかかわらず異彩を放っており、この点からも注目に値する塑像なのである。



双林寺の石塔



天王殿には四天王により守られています。





大きな本堂



表に出ています、最近の千手観音



本来の千手観音は檻の中



檻の中に観音様と十八羅漢



釈迦像の後ろは龍で一杯



観音菩薩三尊



右には大きな鐘突楼



左には大きな鼓楼



シンボルの木、樹齢何年でしょう

**平遥古城**：(へいよう・こじょう、は中国山西省晋中市平遥県の古い町。省都・太原から南へ 100 キロの地点にある。1997 年、ユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録。平遥は清代末期までは山西商人の拠点であり、中国の金融中心地であった。中国では長い歴史の中で戦火にあった、改築されて昔の都市がそのまま残っていることは少ないが、この平遥古城には 14 世紀の明代始めに造営された町がそのまま残っている。

「城」は中国語では城壁に囲まれた町を意味する。明代から清代にかけての中国の典型的な城郭(城牆)、街路の配置、商店や住居などの古建築の保存状態はよい。

清代末期、平遥には大きな票号(近代以前の金融機関)が二十数家あり、中国全土の票号の半分以上が集まる金融の中心地であった。これらの票号は各地に支店を置いて金融業を営んだが、なかでも 19 世紀初頭の道光年間に設立され「匯通天下」として 19 世紀後半に名をはせた中国最大の票号「日昇昌」は有名である。しかしこれらの票号は辛亥革命(しんがいかくめい)で清が倒れると債権を回収できず没落していった。これらの票号の建物は現在でも残り観光地となっている。

平遥は明清時期に各地に築かれた県城の原型がよく保存されており、「龜城」(亀城)の名がある。城内の街路は「土」字形をなし、建築は八卦の方位に準じて配置されており、明清時代の都市計画の理念と基本を体現している。城内外には数多くの旧跡や古建築が 300 ヶ所以上あり、その他明清時代の民家邸宅が 4,000 軒近く残り保存状態も良い。街路に建ち並ぶ商店などはかつての姿を残しており、中国近世の商都の街並みの生きた見本となっている。平遥の城壁(城牆)は明の洪武三年(1370 年)に築かれた。現在は 6 つの城門と瓮城、4 つの角楼、72 の敵楼が残る。南門の城壁は 2004 年に倒壊したため翌年以降に再建されたが、その他の部分は明代のままである。これは中国に残る都市の城壁の中でも規模が比較的大きく、歴史も古く、保存状態が完全に近いものであり、世界遺産を構成する核心部分である。その他、世界遺産には城の外にあ

る仏教寺院の鎮国寺と双林寺、および孔子廟である平遥文廟が含まれている。

その歴史は2700年前まで遡ることができます。現在、見られる平遥古城は14世紀以降、中国の明清時代の建築様式と風貌をそのまま残し、中国で最も完全に保存された文物群です。高さ12メートルで総延長6000メートルを超える城壁は平遥を二つの世界に分けています。城壁の中は古城で、町の風貌や建築物の構造など、昔と変わりにくく残されていますが、一步城門を出ると、現代化された平遥県に入ります。古城の形は巨大な亀のようだということです。平遥古城の南の城門は亀の頭のように、門外両側にある井戸は亀の目のようです。北の城門は亀の尻尾のように、古城で最も低いところになり、積水がここを通過して外へ流れます。また、古城の東西にもそれぞれ二つの小さな城があって、亀の足のようです。

平遥古城の素晴らしいところは、外観が巧妙に造られたほか、中の四本の大通りと八本の通り及び72本の横丁とも機能別に配置されています。更に、当時山西地方の住宅が、ほとんど青いレンガとグレーの瓦でできた四合院なので、町全体の造りは東西南北の網の目のようなしっかりしたものです。四合院の特徴といいますと、壁が高いことと屋根が庭に向けて外が高く、中が低いことです。壁が高いのは商売人が多かったので、強盗などを防ぐため、屋根が庭の中の方へ斜めになっているのは、乾燥した北方にとって、貴重な雨水を貯めるためです。

平遥古城には四合院式住宅が3700箇所あり、そのうちの400箇所はよく保存されている。これら残された建物だけでも当時の繁栄ぶりが偲ばれます。これら建物は当時のままなので、明清時代の古城はどんなに繁栄していたのか想像できます。古城を歩くと、その時代の平遥城にいる錯覚があります。銀行に相当する「票号」平遥古城が当時繁栄したことと言えば、「晋商」（山西省出身の商人）が大きく貢献したのです。

平遥は昔から貧しいところですが、交通の便に恵まれ、行商をする人が多かったのです。これら行商人の中に、全国的に有名な商人も多く出ていました。「晋商」の最も大きな貢献といえば、現在の銀行に相当する「票号」を創設したことです。よそで商売をしていた商人が、大量の現金を持って行ったり来たりすることも不便ですし、盗まれたり奪われたりする恐れもありますから、「晋商」は新しい為替方法で「票号為替」を作り出しました。したがって、平遥古城で中国初の「票号」は「日昇昌票号」が誕生しました。これで、商人たちが平遥の「日昇昌」で貯金すれば、その貯金証明書を持って、全国各地にある「日昇昌」の支店からお金を下ろすことができます。これをきっかけに、「晋商」、「票号」およびその支店が全国各地にでき、一時的に中国経済の動脈を握った。

現在、中国票号博物館になっている「日昇昌」は平遥古城の西大通りの繁華街にあります。南北65メートル、東西20メートルで、面積は広くありませんが、壁が高く、庭が大きくて奥深いです。庭は三つの中庭があり、当時、強盗が入りそうな場所に針金で造ったネットを張った上、鈴も懸かっていた。「日昇昌」の小さな庭は現代のビルディングにある銀行と比べ物になりませんが、金融業発展の共通性が見られる。山西省の商人の一部の活動は中国国内だけではなく、アジア、特に東アジアの金融ネットワークとかがかかっていた。



平遥古城石碑



我が宿泊の旅館



裏通りの朝6時



メイン通り



大勢の観光客



南門



町全体が城壁で囲まれています。



お城の下



昔の大砲ですか？



メイン通りの一筋入った商店



観光用電気タクシー大勢の人



朝早くの自転車通勤の人々